

3 学習した言葉を引用して書かせましょう

次に示すのは、低学年の指導において、教師が感想の例示をしながら、学習した言葉（文章表現）を引用して感想を書かせるように、児童にノートへの記述を促した例です。学習した言葉を引用して書くことは、記述力を高めるうえで大変効果的です。

「はるの ゆきだるま」（東京書籍1年下）説明・発問例 - 1 -

今日の学習で心に残った言葉を使って、感想を書いてみましょう。その前に、先生が書いたものを紹介します（模造紙を黒板に貼る）。線を引いてあるところ（下記の「教師の例示」の傍線部）が、先生の心に残った言葉なのです。では読んでみます。

教師の例示



先生は、「どうぶつたちは、だまっただま いつまでも その 花の ゆきだるまを 見つめていました。」というところが こころに のこりました。

先生は、はじめて よんだときに、とても ゆめのある おはなしだと おもいました。でも、さいごの ところが、ちょっと かなしかったのです。ゆきだるまさんが とけてしまったからです。でも、そのおかげで、たくさんの 白い花が さきました。どうぶつたちも きっと また ふゆになれば ゆきだるまさんに あえると おもって、いつまでも その 花の ゆきだるまを 見つめて いたのではないのでしょうか。

説明・発問 - 2 -



先生の感想と、「わたしも同じです」というところがありますか。それはどんなことですか。

先生の感想にはなかったけれど、「わたしはこんな感想をもちました」ということがありますか。それはどんなことですか（児童の感想は、教科書のどのあたりのことに関係しているか、ページをめくって確かめる）。

いろんな感想が出てきましたね。では、みなさんの心に残った言葉にも線を引きましょう。

線が引けたら、ノートを出してください。みなさんの心に残った言葉を使って、感想を書いてみましょう。

児童の感想例



わたしも せんせいと おなじところが こころにのこりました。はじめは、はるのゆきだるまは、とてもかわいそうだとおもいました。どうぶつたちと、なにもはなせなかったからです。口がないから、はなせなかったのだとおもいました。どうぶつたちは、だまって、いつまでも見つけていました。ぼくは、なんだか、そこでかなしくなっていきました。でも、せんせいとおなじで、またふゆに、あえるといいな、とおもいました。

このように、本時で学習した言葉を引用しながら学習活動を振り返ることは、記述力を高めるとともに、語彙を豊かにしたり、文脈に即して考える力を身に付けたりするうえで効果的です。

学習活動の成果を「書くこと」によって確かめる

次に示すのは、光村図書のホームページから引用した「いろいろな くちばし」(光村図書1年上)の学習活動例(8時間扱い)です。

「いろいろな くちばし」(光村図書1年上)の学習活動例

- 1 教材の写真を見たり文章を読んだりする。(5時間)
 - ・鳥について知っていることを発表する。
 - ・全文をみんなで読み、3種の鳥のくちばしの話であることを確かめる。
 - ・写真と文を照応させながら、「問い」と「答え」を確かめて読む。
- 2 P44とP51の写真を見て、鳥の名前を確かめ、鳥のくちばしの特徴と食べ物に関係に気づく。(2時間)
 - ・くちばしの形とえさのつながりを考えて話し合う。
 - ・自分の好きな鳥を選んで教科書の続きを作る。
- 3 図書館で生き物の本や図鑑を見つけて読む。(1時間)

Q この学習活動ができたかどうかを、どう確かめればいいでしょうか。

A それは、2の学習活動の状況を見ることによって確かめられます。

「次の学習活動」が「前の学習活動」を評価する

学習活動2において、自分の好きな鳥を選んで「教科書の続き」を話したり、ノートに書いたりすることができれば、学習活動1の学習状況は「おおむね満足」以上の状況にあると判断します。つまり、ここでは、「読むこと」の学習成果を、「書くこと」によって確かめることになります。次の例のように、次時の学習への期待を書かせることも効果的です。

次時の学習への期待を書いた例～「スーホの白い馬」(光村図書2年下)～

次の時間の楽しみは、馬頭琴を先生がもってきてくれることです。わたしはきょう、「馬頭琴」ということばをべんきょうしました。「馬頭琴」は、馬の頭の形をしているがっきのことです。きょうかしょには、「いったい、どうして、こういうがっきができたのでしょうか。」と書いてあります。

わたしは、どんな音が出るのかなということが知りたくなりました。

こんど、音楽のときに、先生がもってきてくれるので、たのしみです。それを聞くと、スーホのきもちがもっとわかるようになるかもしれないとおもいます。

「書く」ことによって学習活動をしめくくる

単元や教材の学習指導の終末に、「学習記録を書こう」などの学習活動を設定すると、学習したことの自覚化が促され、「身に付けた力」を一層実効あるものに高めることができます。そのとき、今までにノートに書いてきたことや、教科書に書き込んできたことなどを読み返すことで、実感を伴った「振り返り」とすることが大切です。また、そうなるように、それまでの学習活動において「書く」ことを取り入れるようにしたいものです。

発問例

学習目標をノートで確かめ、その目標達成をめざして、自分たちがどのような学習活動を行ったのかを書いてみよう。

ノートを振り返り、友人の考えや文章の具体的な表現を引用してまとめてみよう。



音読したことを振り返り、自分として努力したことや工夫したことを書いてみよう。

一時間目には、「作品のよいところを自分なりにみつけて、みんなに、『なるほど。』と思ってもらえるように話す。」という目標を立てました。

ぼくたちのはんでは、3の場面を中心にしてみつけました。ノートには、そのときのメモがたくさん書いてあります。その中で、山田さんがみつけた「くちびるを二、三回静かにぬらしました。」とか「くちびるをとんがらせました。」いう大造じいさんの様子がいいと思います。どうにかして残雪をやっつけようとしている気持ちが伝わってくるようです。

それからぼくは、「冷え冷えするじゅう身をじゅっとにぎりしめました。」という表現も好きです。大造じいさんが、息をこらそうにして、じーっと待っている様子がそうぞうされたからです。

話し合いでは、みんながみつけた表現がたくさん出てきて、大造じいさんや残雪の様子や気持ちがいろいろ想像できました。発表会するときももりあがりましたが、ぼくは、はんの中で、みんながみつけたことをノートに書きながら、たしかめ読みをしたことが一番心に残っています。

ぼくがみつけた表現を、川野さんが、「それとってもいいね。」と言ってくれ、はんの発表のときに使うことになりました。残雪がハヤブサから仲間を守るとき、「ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。」というところです。残雪はどうなるんだろう、とぼくは読んでいてきんちょうしました。

教科書のさし絵にもあるように、どう考えても、ハヤブサのつめに勝てるわけがありません。ぼくは、仲間を守ろうとしている、ひっしな残雪をおうえんしました。この場面は、音読でも、なんども読みました。何回読んでも、このところでは、ぼくは、きんちょうします。残雪になったつもりで、おうえんするように読みました。

学習記録を書く力を育てる手だてとして、自己評価シートに記述欄を設け、自己評価したことの「理由」を簡単に述べさせることも効果的です。低学年の場合は、記述例を教師が示すなどして、無理なく書けるように段取りをする必要があります。